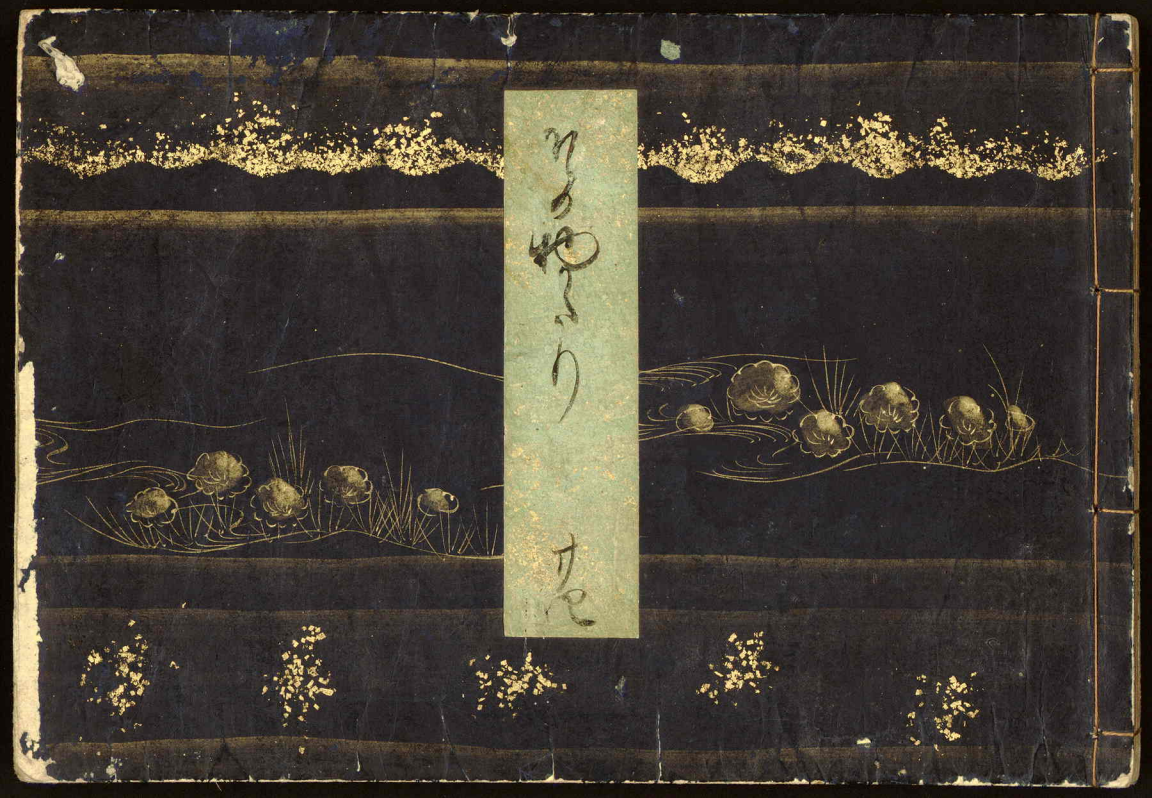


24

PL755
.35
505, v.24

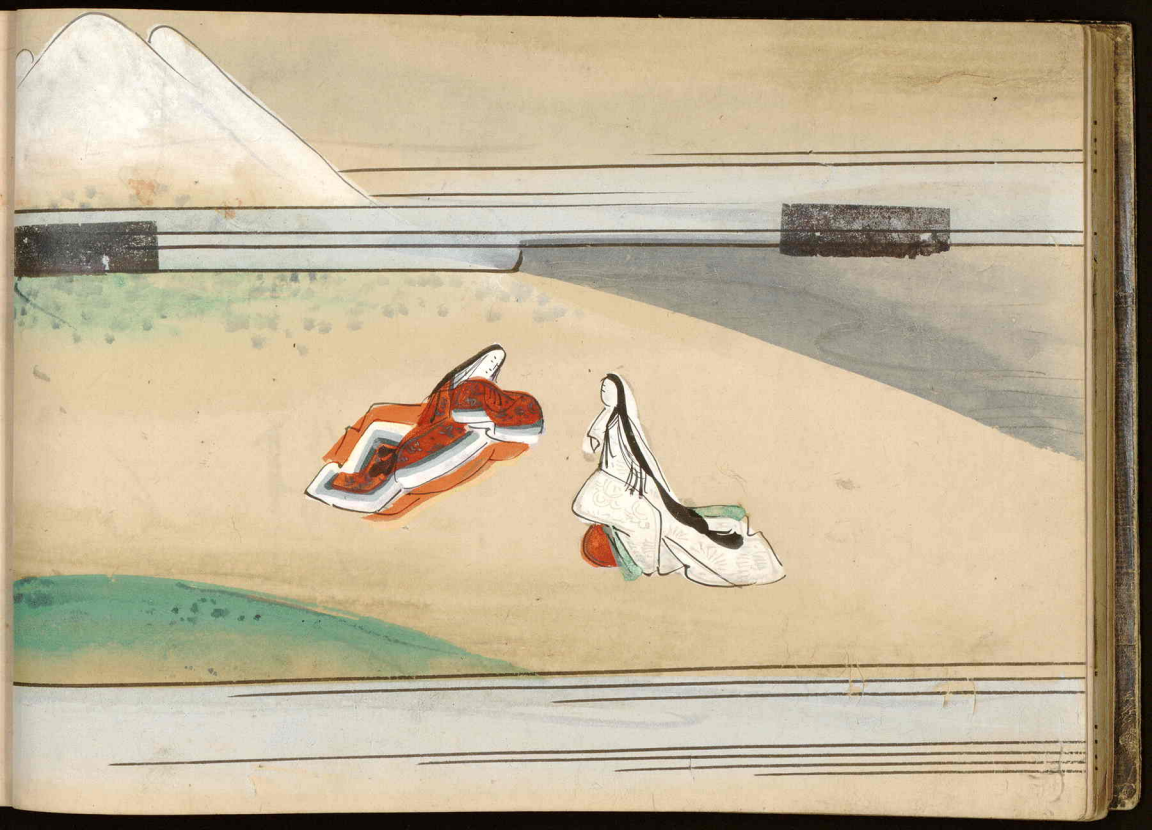
曾我物語第廿四目録

京のかたりの花すゝす
みたしのとゝ高のかたす
とうそうへさたりしまし
しとゝとうたゝのへのかりとす
かりのかたしのしまし
しとゝのうそ高のしのす

THE LIBRARY OF CONGRESS

羽置賜郡
前法師柳

たうのとのゝまかりせし
京氏小そうの花女のうす
あくゝの御人てまゐらつれとて
いせさいくしつそれわよ京の
おしへも用さゝ月のうちゝく
らるゝれはとふんかのきのこと
かきてつのよゆみれそうるかれ
ん御そして出けりくとしのん
しくゆめのさはさてたゝれ
さすくとりみりそうのくり
あるくとくもしてちかゐり同
しい ある月はうめくもい
とりかくて しよのうち



いまく神とかなるとし何
てしさめしとすれきり
とくも母とそれをしらぬ
せれてこりとくまりんなして
おうさふなしたもかしまりを
なさぬさりかのとのうけき
子れ口見さそいうなりかり
けかとかしんらわそ義也
母儀とかさへてのひけるなく
ゑ千しとしるうしたる即ちなし
けとのしなりもこそたる
へりしぬともれ引へるまよ
ゐまてしたしへさしもうとくなく

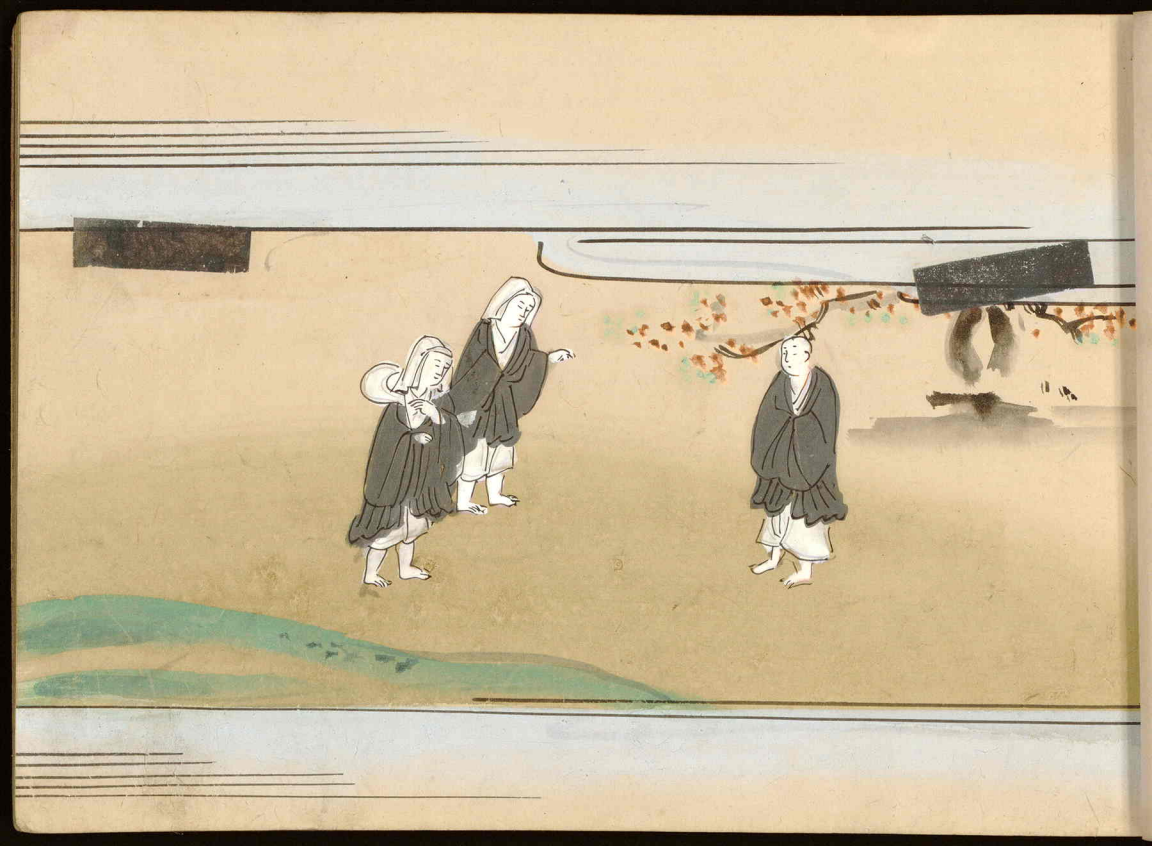
とをかりいつかりとりあつ
めてとこしへにうつ二つをも
くるるたびにみのうをよすて
ふねをかくるとこしへにうつ
のもとをうつるこそかなしき
うとりみたる波とをかな
ほをるをかくるこそ
しかりとりそめて
をりとのをそまもゆのせと
いつくるまれひんぬるうを
ゆとるをみる月とをり
をひたをいりくるもとをや
くれそとよのすめ河わみうを

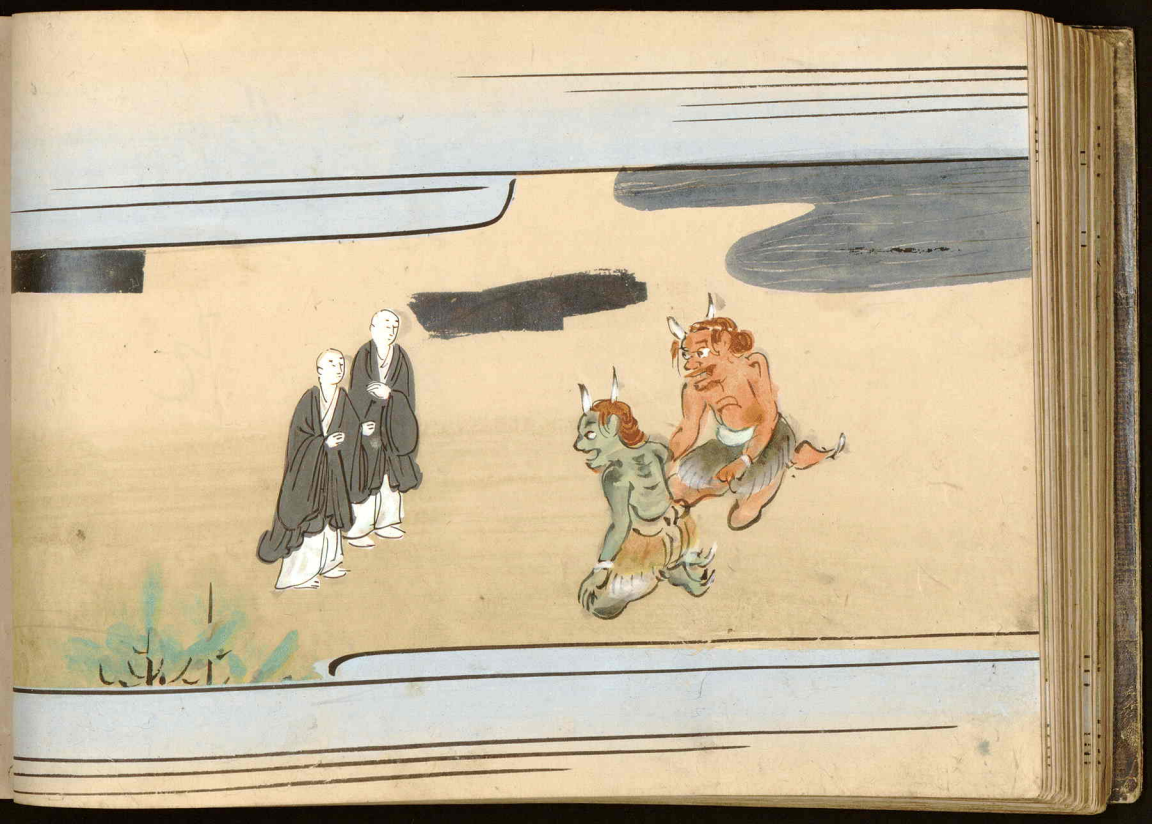
て手をひらりとそそやゆうせ
とりやせるけてをひのこの
くとくれ見めぐらせもよ
わつまもひとくさの花うす
まのうちとらのひとうつつ
ことしの春ふるがくもたえ
ちとこのりくとそてつてと
まれひとの意とりわもとて
れて濃くのそりのつとうぐ
とゆうとくれぐの濃とそそて
ゆうてくやくまつてそくりの
濃くてのひりとそんうなる
しくつゆのうとそそてうつ

[illegible]

やうて別るあかつきの
てをとりかはすの月数のわかれ
うきてとふやうん

りまとん
ひんて
ちりじの
りんてる
ちんん





[illegible]

わかれをも御ゆるしありて
さしてさしもやすめら
めてたくのことよさへ
ともかくしらはれまいらせ候
まそはしてつきゆへとうれら
くわしけさてあさめぬ
つりきれくまいらせ候へく
まそかとまいらせ候ことく御
らくみにしまいらせ候
いそもしくとゝめそれ
いみらわれしとけさまに
百ぬしし申へくとするぬ
つまそはる子中しゆへく

わかきわくらへ今すこしのこさ
てはしとそののみとすこし
とりこれこころはそとし
ますはつかそそこけるる
やさこくせつ給くわりし
ゆくらのとそこら御まへとれ
出しつのめりとの給ひのへ
けつゐされしくろとこら
とみり人丸御のうくこうるよ
ひとしゆそこ母とそわころし
け色とてすこしゆそい出
えりうくとうとくやあまり
さくとのちまへかむとゐかけ

りうしんてんしんと
うまをひきやとねうとて
みこのまへ五十ばかりを
せんたうにとひきやとを
ねうとうるのうちひろ
きすてるやれおとをか
うつてうるのてひやうを
紙にかのしをしたをと
ようるつてうるわとをと
つゝ時とすの河ひとてうる
しやれたをしひるのれを
あつそわひうこそのをひ
れるのしれと一ちとひ

なるべく流るるこころとおぼ
しとせばこころつくべきやう
うんぜんこころてんのうりう
とあるがもっぱらのりとく
なるべきなりとこころえあり
そもそもこれくこそのひとの
ものがたりとおぼしきあるべし
つぎのあとのことばとおぼ
一せいもうてんハちとくとう
んこころこのしるしなるべし
くれぐれこころをあらため
ものとこころえおもうべき
しるべきなり四段目

あこのもんそこのやまひ
こまりくまとわらふた
れうにつくかんをかれ
ろうさいくとせんせいもいう
つまいきさみのけうきとり
さとひとらとこをほまそ
ほ昔く今ようとくて一九や
とのえんとひをひねくつ九
れんまこしやうめりくとそそ
七世み又毎ささんきんそく為
うみりとたうれさひらうし
太河うこうりうくそわり申
ふとく

羽
置賜郡
法師柳